

発刊のあいさつ

浦添市教育委員会教育長 保久村 昌 伸

浦添市教育委員会は、一九八七年度（昭和六二年度）に「琉球王国評定所文書」第一巻を刊行しました。これまで琉球王国の近世史にとって重要な文書であるという高い評価を得ながらも、同文書は断片的にしかならぬ断片にしか翻刻出版されませんでした。当教育委員会では、現在確認されている全史料を「琉球王国評定所文書」全十八巻として刊行する予定です。

浦添市は、歴史的には「うらおそい」の言葉にも示されるように、沖縄本島の政治の拠点として栄え、特に大交易時代と称される時期には中国等とも貿易を行っていました。このような「国際性ゆたかな文化都市」をめざす文化事業の一環として「琉球王国評定所文書」の刊行事業を推進しております。

本事業が琉球・沖縄歴史の研究の発展にいささかなりとも貢献することになれば、これに過ぎる喜びはありません。本事業の遂行にあたっては、新たな史料発掘作業を始めとして幾多の困難が予想されますが、各位の従前にまさるご理解とご協力によって、その完遂を期したいと決意しています。

「琉球王国評定所文書」第四巻では東京大学法学部法制史資料室所蔵の琉球評定所記録（旧琉球藩評定所書類）の中から旧琉球藩評定所書類目録の番号に従って目録番号一三九六号～一四〇八号の九文書を収録しました。史料の大きな内容としては、一八四七年（道光二十七年）から一八四九年（同二十九年）までの三年間のものです。主にキリス

ト教布教のため琉球に派遣されたイギリス人宣教師ベッテルハイムやフランス人宣教師ル・テュルデュ、アドネの布教活動やそれに対する首里王府の対応を詳細に伺い知ることができません。また、接貢船の帰国によってもたらされた中国情報や久米島の沖干瀬へ座礁したイギリス船を救助した際の日記も含まれています。以上のことから伺われますように、本史料は琉球・沖縄歴史の解明の上で重要な史料になるものと確信しております。多くの市民をはじめ研究者の間で広く活用されることを願っています。

最後に、本事業のために貴重な資料を提供し、また、刊行について御快諾下さいました東京大学法学部法制史資料室並びに国立公文書館の関係各位、また、史料の筆耕解読にご協力下さいました研究者各位に深く感謝申し上げます、発刊の言葉といたします。

一九九〇年（平成二）三月吉日